

証は綴込まれていない。

杉山地区から編纂室に出されたものには、

「大正三年に杉山村の地に硅長石（巨晶花崗岩・ベグマタイト）、硅石や緑硅石が発見され（一九一五）大正四年、空閑昌太郎氏が事業主となり採掘粉砕の事業を始められた。」輸送販売のため杉山硅石事務所が出来、従業員宿舎や搬出道路の改良などで他市町村より人も転入し、戸数も六〇戸以上となり人口も三五〇人ほどになり、大集落となった。雑貨店や旅人宿も出来、日常生活も便利になった。硅石事務所より七山村池原事務所間の電話架設もされた。

大正五年には空閑氏が水車式発電所を建設、五kwの光が六〇戸の家庭を照らし喜ばれた。

と述べられている。つぎに南山村溜山にある佐嘉鉾山は村会資料では筆者の見落しか、見出しえなかった。

『富士町誌』によると、「鉾区一九、八七三アールを有し、佐賀市水ヶ江町副島愛泉氏が、昭和十二年に金、銀、銅、硫化鉄、モリブデン、硅石、長石、緑硅石を鉾産物としたものであったが、戦時中は専ら飛行機に必要な緑硅石を採掘し軍需に努めた」とある。

## 五 電気事業

この項については、『富士町誌』の「電気の普及と発達」（一七二―一七八頁）の記述を時代順に並べ変え、昭和二十年までに開設されたものを、ほとんどそのまま引用した。

したがって、発電容量や施設などは昭和四十二年現在であると思われる。

### (一) 鮎の瀬発電所

富士町地区（旧小関村鮎の瀬）では堰堤式による水力発電所が建設されたのは、佐賀県下でも広滝発電所について（明治三十一年に着工、同三十二年一月に竣工）鮎の瀬発電所が最初であった。当初の最大出力は七〇〇ワットの発電機二台で二・四〇〇ワットだったのが同三十三年発電機一台最大出力三五〇ワットを増設したから、都合三台の発電機がすわり皆で最大出力一、〇五〇ワットを有することとなり、そのころは「水から火が出る」世にも珍しいものといわれ、話題となり近郊はもとより遠方からも見物人が詰めかけてきたものだった。

ところでこの電力は長崎県波佐見金山専用だったので一般の灯火・動力には配電されなかった。そこで地元では電力の供給地ではあっても電力の需要地ではなかった。

これでも当時は工事も難工といわれ、故障も続出した。就中大正四年四月十六日、発電機を握えつけ、試運転の際、突然爆発事故が起こり、多くの見物人が来て取り巻いていたところから、見物人に死傷者を出したという珍事もあった。

その後、金山の不振と相俟って明治三十二年十二月に佐賀電気軌道株式会社（広滝発電所）に買収されたのであった。それから大正八年七月九州電灯鉄道株式会社に吸収され、大正十一年六月東邦電力株式会社が受け継ぎ更に昭和十七年四月には国の施策である電気事業の方針に従い、発電電と配電とに分離されたため、鮎の瀬発電所は当然事業系体によって、日本発電機株式会社と九州配電株式会社とに分離され、従って電気供給も一般の需要に移され昭和二十六年五月九州電力株式会社がこれを引き継いだ。

(二) 川上川第二発電所(富士村大字小副川字矢落)

古湯温泉の対岸に、大正三年五月、運転を開始し、最大出力は二、二〇〇ワットを発電している。

有効落差 三八・二メートル

水圧管 一条 長さ 八三・四メートル 管の直径 一・八メートル 管の厚み 九ミリ

水車 横軸フランシス水車 一、〇六七ワット 二台 縦軸フランシス水車 七〇九ワット 一台

使用水量 毎秒二・七八ト 三台 毎秒二・二三ト 一台 二

発電機 横軸同期半閉型 九四〇KVA 二台 縦軸同期開放型 八六〇KVA 一台

(三) 川上川第一発電所(富士村大字下熊川字堤原)

大正五年八月に運転を開始し、最大出力 八、四〇〇ワットを発電している。

なお嘉瀬川水系の発電所で発電した電力は、全部ここに集められて各変電所へ送られている。

有効落差 一二五・八メートル

水路 四、四八七・八メートル(内隧道三、四九五・三メートル)

水圧管 三条 長さ三一五メートル 管の直径一・二メートル 管の厚さ 九・一七ミリ

水車 横軸フランシス水車 出力二、八七〇ワット三台 使用水量二台当り 毎秒二、九六ト

発電機 横軸同期閉鎖通風型

容量 二、七五〇KVA 三台 電圧 六、六〇〇V 回転数 毎秒七二〇回

(四) 杉山自家用発電機

南山村杉山地区では、鉱業のところで述べたように、大正五年水車式発電機による最大出力五ワットの送電が始まった。

当時杉山鉱山(硅石鉱)主だった西松浦郡曲川村四番地、空閑昌太郎氏が鉱山の自家用として設置されたものだったが、鉱主と杉山部落との間で話し合いが成立し、住家六〇戸が電灯の供給を受けることとなった。それから大正十一年に東邦電力の配電区域に編入され、鉱山経営の自家発電は自然廃止となったわけである。

(五) 中原水力発電所

大正九年五月、当時北山村大字中原部落の居住者三十三戸が共同で水車式直流復捲発電機5HP機一台を備えつけ、夜間だけ各家庭の燈用として発電を開始した。それから同十一年二月配電区域の拡張や送配電施設の拡充を図ると共に事業主体をし、保証責任北山村水利組合を創設して、これに発電所並びに施設資材一切を引き継いだ。ところが同十三年八月十八日中原の大火事で電業事務所も資材なども殆ど焼失し、事業のうえに大きな傷手を被ったが同十三年十二月、更に陣容を整え、保証責任北山村利用組合の経営に移し、発電機四五ワット、三相交流一台を備えつけて、北山地区で七六三戸の需要家に一、三三〇灯(定額灯)と従量灯二〇燭の配電に踏みきったのであった。

それから昭和八年一月、衆望にこたえいよいよ北山村営に移管し、太平洋戦争を契機として発送電（発電と送電）と配電は国の施策による電気事業統制に従って、九州配電株式会社に統合され、それから今の九州電力株式会社となったのである。

(六) 川上川第三発電所（富士村大字畑瀬字千田ヶ原）

大正十一年八月運転をはじめ、最大出力一、四五〇ワットを発電する。

有効落差 二八・四メートル

水圧管 一条 長さ 六三・九メートル 管の直径 一・九メートル 管の厚み 七・九ミリ

発電機 横軸同期半閉型 一、六四KVA一台 回転数 毎秒五一四回

(七) 川上川第四発電所（富士村大字関屋字重野）

大正十二年五月に運転を開始し、最大出力一、一〇〇ワットを発電している。なおこの発電所は日本で最初の自動発電所として建設された。

有効落差 四二・五メートル

水圧管 一条 長さ 八五メートル 管の直径 一・四メートル 管の厚み 六・四〜七・九ミリ

水車 横軸フランシス水車 一、二九〇ワット一台 ○使用水量 毎秒三・四七ト

発電機 横軸同期開放型 回転数 毎秒六〇〇回

## 〔教育〕

### 一 明治期の教育

#### (一) 近代教育制度の発足

##### 1 学制の発布と学校の開設

明治政府は富国強兵・殖産興業の政策を進めるためにも、国民の知的水準を高めることが必要であり、そこで政府は教育制度の近代化にもつとめる必要があった。

明治四年（一八七二）七月、廢藩置県断行について、同月十八日文部省が創設された。最初まず江藤新平が文部大輔（次官にあたる）に任ぜられたが、すぐに司法卿として転出し、ついで同じ佐賀藩出身の大木喬任が文部卿（大臣にあたる）に任ぜられた（六年四月まで在任）

翌五年八月、日本における近代的学校制度の発足を告げる「学制」が公布された。そのさい太政官布告「学事奨励に関する被仰出書」（学制の序文）には、

……人能ク其オノアルトコロニ応シ勲励シテ之ニ従事シ、シカシテ後初メテ生ヲ治メ産ヲ興シ業ヲ昌ニスルヲ得ヘシ。サレハ学問ハ身ヲ立ルノ財本トモイフヘキ者ニシテ、人タルモノ誰カ学ハスシ可ナランヤ……自今以後、一般ノ人民、華土族農工商及婦女子必ス邑ニ不学ノ戸ナク、家ニ不学ノ人ナカラシメン事ヲ期ス。……